

内戦によるシリア・パルミラにおける文化財の被害

西藤 清秀

Damage to Archaeological Sites during the Conflict in Palmyra, Syria

Kiyohide SAITO

 キーワード：パルミラ、東南墓地、地下墓、盗掘

 Key-words: Palmyra, Southeast Necropolis, underground tombs, illegal digging

2011年9月にパルミラ (Palmyra) を訪れた際、パルミラ博物館は内戦から生じる暴徒・強奪者から展示品を守るため、展示物の地下収蔵施設への移動がおこなわれていた。遺跡では公開していた地下墓を埋め戻す作業がおこなわれ、盗掘者への防御を着実に実施している様子が見て取れ、まだ博物館関係者には余裕が見られた。しかし、その後、内戦は悪化するばかりで、状況は日を追って厳しくなっていた。

パルミラでは、2012年初めから2013年秋頃まで都市遺跡を挟んで戦闘がおこなわれた。政府軍が都市遺跡北側のアラブ城に陣を構え、非政府軍が都市遺跡南側に広がる農園を占拠し、互いに相対していた。その結果、戦闘の流れ弾が博物館北側の壁を破壊するに至ったが、博物館への強奪には繋がらず、すぐに壁は修復された。この戦闘で最も被害が生じたのがベル神殿である。神殿境内の列柱の柱やフリーズ部分が一部被弾、数カ所が欠損し、さらに神殿の周壁も被弾した。しかし幸いにも戦闘による被害は最小限にとどまったと言える。

この戦闘に乗じて略奪行為がおこなわれ、我々に関わる事柄では、ベル神殿内にあるかつて外国調査団が宿舎としていたゲストハウスの家具や備品が略奪された。このゲストハウスの一室は倉庫として使用され、我々の機材の一部も保管されていたが、ほとんど奪われてしまった。ベル神殿の西外側にはかつてのパルミラ博物館があり、現在は外国調査団の倉庫として使用されていて、各調査団の発掘調査で出土した遺物や各調査団の機材が保管されていたが、この倉庫も略奪にあった。

しかし、2013年秋以降、パルミラの戦闘状態は落ち着き、略奪にあったゲストハウスやベル神殿前の倉庫も何も無かったような佇まいを見せている。しかし問題は、地下墓の盗掘である。盗掘は、戦闘状態が治まった現在も変わりなく続いている。

我々は、1990年からパルミラ東南墓地で4基の地下墓

を発掘調査し、2基の地下墓 (Tomb F & Tomb H) を修復・復元し、観光客に公開した。上述のように2011年に埋め戻して防護した地下墓は、市街地から離れたていたことと非政府軍の占拠地ということが相俟って、農園や東南墓地の他の地下墓と同様に盗掘されるに至った。この盗掘の状況が判明したのは2013年秋のことである。それまでは農園より南側は非政府軍が占拠し、一般住民も近寄ることができなかったからである。

2013年秋、政府軍が非政府軍を掃討したため、一般住民を含め文化財関係者も農園や東南墓地に出入りすることが可能になり、初めて盗掘の状況が把握できるようになった。東南墓地にはシリア政府が修復・復元した地下墓5、9、11号墓、日本がおこなったF、H号墓 (図1, 2) があり、F号墓以外はすべて盗掘された可能性があった。しかし、実際に内部が荒らされ、彫像が持ち去られているかは不明であった。もし彫像が持ち去られていた場合を考え、パルミラ博物館から東南墓地地下墓の彫像の写真が欲しいという依頼が我々調査団にあり、調査団所有の写真や古代オリエント博物館所蔵の写真のパルミラ博物館に送った。そしてそれはインターポールにも送付するということがあった。インターポールが周知すれば東南墓地からの彫像が海外に持ち出された際、すぐに判断できる。

そして約1年が経過した2014年9月パルミラの警察によって我々が調査し、修復時に戻したH号墓の胸像11点のうち3点が押収された。H号墓はやはり盗掘され、実際に彫像が持ち出されていたことが明らかになった。よってパルミラ博物館は、地下墓の土砂を除去し、墓室内の確認をおこなった。結果は予想通り、盗掘者は修復した明かり窓を壊して墓室に進入し、明かり窓から持ち出せる大きさの胸像をすべて持ち出し、大きな饗宴像は首を打ち割り頭部を持ち出していた (図3~6)。これは、我々にとっても予想はしていたが衝撃であった。今となっては、残りの彫像も発見されることを願うだけである。



図1 H号墓主室北側壁壁龕饗宴像



図2 H号墓南側室西側壁の胸像



図3 H号墓主室北側壁壁龕：持ち去られた饗宴像頭部



図4 H号墓主室北側壁壁龕：剥がされた石棺の胸像

一連の出来事を通して、一つ問題点が浮かび上がってきた。我々は、シリア政府のフィールド・ミュージアムの実現に協力する形で地下墓の修復・復元をおこない、出土した彫像をすべてその墓に戻した。まさに発掘調査の成果の展示でもあり、多くの観光客に見学してもらうことができ、非常に満足していた。しかし、今回、政情不安が文化

財に対してどのように人々を行動させるのかを目の当たりにし、文化財の重要性をパルミラ住民にきちんと伝えていなかったのではないかとこの自責の念にかられた。ただ、住民には「ここに宝が埋まっています」という情報を流すだけの修復・復元であったように思えてならない。

東南墓地での盗掘はまだ続いている。パルミラの彫像は



図5 H号墓南側室西側壁：持ち去られた胸像



図6 H号墓主室奥棺柩：叩き割られた饗宴像浮き彫り

市場価値が高いと見られ、シリア国内、レバノン等の国外で押収や確認がなされ、すでに100点は超えている。しかも現在、ユーフラテス川東岸から多くの人々が避難民としてパルミラに流入している。これはまた新たな盗掘や略奪を生み出す要素にもなる可能性がある。何よりも早期の内戦終結を願わずにはおられない。

以上の文章はパルミラ古物・博物館局、シリア古物博物館関係総局からの情報提供をもとにまとめた。H号墓盗掘の写真（図3～6）はパルミラ古物・博物館局からの提供である。

西藤 清秀
奈良県立橿原考古学研究所
Kiyohide SAITO
Archaeological Institute of Kashihara,
Nara Prefecture